

衰退していく日本？

先日、読売新聞のネットのページで、日本の衰退の予測記事（特にGDP）について特集していました。母国が衰退していくことは一国民として残念ですが、一面では考え方を抜本的に変えていく良い機会と捉えることもできます。

結論を先に言えば、日本人の志向するところを経済的な豊かさから心の豊かさに切り替えていくことです。「心の豊かさ」、「心の豊かさ」とマスコミも社会もこれまでに訴えてきましたが、いまだ人々の眼の大部分はそちらに向いていません。



先ごろのブータン国王夫妻の来日は、現在の日本社会を振り返りみる絶好の機会でした。「国民の総幸福」——素晴らしい言葉であり発想です。現地に行ったこともないので確定的なことは言えませんが、テレビに映ったブータン国民の姿や国王夫妻の振る舞いを見ている限りでは“さもあんな”と想像されます。

GDPは日本とは比較にならない少なさ（世界で161番目）で、産業の発展もはるかに遅れている。でも、人々の表情は穏やかで明るい。複雑な人間関係や生活に疲れた日本人の表情とは対照的に見えました。

ここで突飛な例えですが：

終戦直後の自分が子どもだった時代と今の子どもたちの時代とどちらが良いかなんて簡単に結論は出ないでしょう。



食糧さえ十分に満たされず、おもちゃもほとんどが手作り。竹トンボ、水鉄砲、めんこ・・・信州の田舎だったので、冬のスケートは田んぼに水を張って凍らせたリンク。スケート靴ではなく下駄スケート。自分などは山から木を切ってきて製材所で板にしてもらいスキーまで作ったものです。放課後は暗くなるまで校庭で遊んでいた。ガキ大将はいても陰湿ないじめはなかった。

今、ビジネス戦略からくる高価なおもちゃに囲まれた子どもたちに創造性は培えない。ナイフで鉛筆を削れない児童。登下校には父兄やボランティアが安全の見守りをしなくてはいけない。家に戻れば母親は塾の費用捻出のためにパートに出ていない。置いてあったインスタント食品をチン。車があるのは便利だが維持費が大変で結局お金に追われて働くようになる。すべて物の豊かさ、便利さを追い求めて行き着いたところなのです。



もっと飛躍して：

奈良・平安時代の日本人と現在の日本人とどちらが幸せか、なんてこれも簡単に結論は出ないでしょう。文明の進歩が即人間に幸福をもたらすというのは錯覚です。何事も忙しい時代に追われている今は、あまりにも変化が速すぎて高齢者はついていけない不安や苦悩も抱えているのです。

世界を瞬時につなぐ情報産業の発達は、逆に危険な面も内包しています。情報の取り扱いによっては、一斉に崖から海に飛び込むネズミのように、人類全体が滅亡の道に飛び込んでいくことがないとも限らないと思われるからです。すべて杞憂であればよいのですが……

ということで、仮にGDPは思うように伸びなくても、人々の心が豊かになる社会へと価値観を転換していけば“衰退していく日本”などという心配もなくなると思うのです。

さらに言えば：



古代史に刻まれたギリシャ、ローマの繁栄と現在の姿、その後「太陽の沈む時がない」と言われたスペイン帝国、そしてオランダ、やがてイギリスの海洋支配、新大陸アメリカの台頭、そしてこの半世紀にちょっとだけ顔を出した“経済大国”ニッポン。次は中国、インドなどが世界の経済面での覇者を狙っています。なにか『平家物語』の一節が浮かんでくるような……。

世界史に映し出された各国の経済的な盛衰に学びながら、衰退の傾向を一人ひとりの国民が本当に幸せを実感できる社会を築いていくきっかけとしていくことができれば、仏法でいう「変毒為薬」（毒を変じて薬と為す）につながっていくと思うのです。

「気まま随想」——これまで「気まま」とは言いながら、内容も掲載日も結構“まじめ”だったような気がしますが、今月の稿はまさに「ドン・キホーテの独り言」、文脈も乱雑で勝手な私見です。

反論やご意(異)見のある方は、掲示板に書き込んでいただければ幸いです。